

## 体型の流行と胸部のファンデーションについて

### The Fashion of the Body Proportion and the Foundation of the Bust

大矢 愛美  
Manami Ohya

#### Abstract

Our consciousness of proportion has been changing. At present, women with a big breast and/or a big posterior are thought to be ideal. Especially, more attention has been placed on the size of the bust. Attitudes toward proportion have changed a great deal since olden times. Any proportion, no matter how well it may look, is destined to fall out of fashion. There is a close connection between popularity of body proportion and that of clothing. Underwear plays an important role in making one's body proportion attractive.

In the present study, light has been shed on the bust in relation to total body proportion. In addition, the history of underwear, modern brassieres and the like are examined.

#### 1. 緒 言

現代の体型に対する意識は目まぐるしく変化している。5年程前にアンケート調査した時には、実際には標準体型でも、さらに細くなりたいと思っていたのが、現在では、細いだけではなく、ほどよく丸みもあり、バストやヒップの豊かな女らしい体型が理想となってきた。特に今は胸の大きさに注目されているといえる。このようにプロポーションに対する理想が、次々と変わることは今に始まったことではなく、従前の事実である。ただ好まれる体型の変化のサイクルが早くなっているということだけで、どんな均整のとれたプロポーションでも、いずれは、飽きられ時代の趨勢に流されてしまう。それは衣服の流行と深い関係がある。その時代の理想とされている体型を、どれだけよく表現できるかは、ファンデーションが重要な要素であると考えられる。そのため今回は体型の流行や、体型の中でも特に関心が寄せられている胸部について取り上げ、胸部に関するファンデーションの変遷や、現代の胸部のファンデーションが、胸を美しく補整するためにどのように役立っているかなどについて検討した。

#### 2. 体型の流行

古代ギリシア人も、人体のもつ比例の美しさに深い関心を示していた。紀元前5世紀頃の彫刻家のポリクレトスは、標準型を7頭身と決め、ギリシア人は、これをキャンノンと呼んだ。その後約1世紀後に、彫刻家のリシッポスが新しく人体比例の標準型を制定した。今度は8頭身と決め、これが今日の8頭身の始まりである。8頭身というプロポーションは、頭部と全身の

関係が1:8の比を持つということだけでなく、黄金比(1:1,618)の近似値となる。黄金尺(モジュロール)は人体の寸法と数学との結合から生まれたもので、どんなデザインにも適用できる尺度である。基本として、自然な形で手をあげた人間を想定して、上げた手の先から頭頂まで、頭頂からへそまで、へそからかかとまでという3つの区分に分ける。へその位置が全体の1/2にあたり、この1/2を1とすると頭頂までが1.618、手先までが2となり、1:1,618:2の黄金比となる。これが美的プロポーションの比率である<sup>1)</sup>。

現代の流行の体型は、完成美というよりも主観的に好まれる体型であるといえる。女性雑誌などでは体型に関する特集などよく見かけるが、今はふっくら丸型体型で、健康的で女らしいイメージが大切である。今までは細ければよいと思われていた脚もただ細いだけじゃなく女性らしい部分もなくてはならないとされている。魅力のある体型としては、ポッチャリ型、全身のバランスがとれている、ウエストが細い、胸の形がいい、ヒップアップしている、脚が長い、足首が引き締まっている、ふくらはぎがきれい、出るところが出ている、痩せ型が、上げられている。逆に嫌いな体型としては、痩せすぎ、ずん胴、胸が大きすぎる、太りすぎ、骨太、下半身デブ、幼児体型、体に締めりが無い、足首が太い、お尻が大きいなどが、上げられている<sup>2)</sup>。これから瘠せ型や、胸の形がいいというのは理想でも、瘠せすぎとか、胸が大きすぎるというのは魅力がないとされ、何事も程々が良いと考えられている。

5年前の調査<sup>3)</sup>と比べると、5年前の時は下半身の不満に集中していて、足が太いとか、太ももが太いなどの悩みが圧倒的に多かったのが、現在は、悩みが多様化していて、5年前には悩みとしてはほとんどありえなかった痩せすぎという事が言われるようになったのは、やはり体型の流行であるといえる。

### 3. 胸部について

胸部は頸の下にあつて腹の上にある軀幹の一部分である。背中や腋窩なども胸部であるといえる。胸部は、前面、側面、後面の3つの部分に分けられ、日常的に胸といわれているのは、前面である。さらに、胸骨部、鎖骨部、鎖骨下部、三角胸筋三角、乳房部、乳房下部の6部分に分けられる。しかし、一般的に胸と言うと乳房が連想される<sup>4)</sup>。乳腺と脂肪でできている乳房は、上は下の約3倍、内側は外側の約1.3倍動きやすくできている。歩いたり、走ったり、手を伸ばしたりする動作をするたびに乳房は形を変える。だから、柔らかくて動きやすい乳房は、衣服のデザインに合わせて自由自在に形づけられるといえる。また乳房の重さは、片方で150gから500g程度で、平均すると約250gある。意外と重さのある乳房は、胸の筋肉の上にとただ乗っているだけで、皮膚のみで支えられている。皮膚も年齢とともに弾力がなくなり、乳腺が破壊され、さらに柔らかくなった乳房は垂れていくことになる。そんな乳房を支えるのは、胸部のファンデーションである、所謂アンダーの両サイドから上向きにサポートする機能を持ったブラジャーである。人間の身体は、横からの抵抗に強く、前後特に前からの抵抗に弱くできている。ブラジャーも前後ではめるのではなく横幅ではめるものである<sup>5)</sup>。このように胸部のファンデーションは女性にとってとても重要である。

女性の胸はさまざまな象徴する例として、フランス革命のときのドラクロワの絵で“民衆を導く自由の女神”がある。この有名な絵の中で胸は、美しく大胆で戦闘的で高貴であるといわれている。エジプト神話では、胸は知恵も象徴している。また胸を希望や崇拜の場所と見た人

もいた。胸を庇護と慰めの場とするのは、旧約聖書の中にも出てくる。このように胸に多様な意味を感じるのは、根底で女性を強く意識しているからである。ヘーゲルは、“自然哲学、の中で、動物の表面は均整で、女性の乳房も左右対称であるとし、“美学、において抽象的外面的な美は、均整という抽象的形式によって示され、悟性によって把握されるとしている。しかし乳房が美しいのはその形態においてである。

胸の大半を占める乳房が胸を代表していることは、英語のbreast、独語のBrust、仏語のseinなどが両者の意味を持つことから裏付けされる。男性が、大胸筋が発達して広い胸幅をもつ胸で男らしさを示すようになったのは、ルネッサンス以後のことで、古代ギリシアの彫刻では、男性の胸も乳房の形に近い盛り上がりがあるのが少なくない。古来日本でも女性のような起伏をもつ彫刻は仏像にも見られる。飛鳥時代の中宮寺の弥勒菩薩半跏像や、奈良時代から平安時代にかけて作られた十一面観音菩薩の多くがそれであるといえる。仏教的な思想が母性原理に基づいているためであるからかもしれない。古代日本人は胸乳の豊かさを素直に賞讃していたが、仏像を除いて、乳房美が、詩歌、文学、絵画、彫刻から時代とともに全く消えてしまったのは、日本人と意識構造に一因があると言われている。西欧と日本では宗教的な違いが大きな要因ともなっている。日本で乳房が再び表面に現れてきたのは明治以後である。日本に比べて西欧では古代から絶えず、乳房をいかに美しく見せるか努力してきている。そのため、胸のファンデーションもさまざまな形で発達してきた。

#### 4. 胸部のファンデーションの歴史

以下は、胸部を覆うファンデーションを年代順に列挙した。

「コルセット」 (corset)

- 女性固有の最初の下着はクレタで紀元前1500年頃つくられた。クレタのコルセットは前部が大きく開いていて、紐締めで閉じる。アンダー・バストを支えながら乳房を押し上げ顕示されている。

「アポデスム」 (apodesme)

- 古代ギリシア女性が初めに用いた下着で、布製の小さな帯で乳房を支えるようにアンダー・バストに巻き付けた。これは乳房を誇示するのではなく、カムフラージュし、歩くとき乳房が動かないように用いられた。

「アナマスカリステル」 (anamaskhalister)、(マストデトン) (mastodeton)

- アポデスムが、赤い細いリボンとなって胸からウエストまで巻き付けた。これは少女の間で流行したと言われている。

「タエニア」 (taenia)

- 紀元前3世紀から4世紀末にいたるまで、ローマ帝国ではさまざまな下着が生まれた。アポデスムから生まれたタエニアは、乳房の下に巻き付けられた。

「ファシア」 (fascia)

- 少女達が、タエニアよりさらに幅広のバンドを用いた。これは、乳房を覆い、乳房の発達を抑えるものだった。

「マミルラーレ」 (mamillare)

- ファシアをさらに進めたもので、少女の胸が発達しはじめると、皮のマミルラーレで押しつ

ぶされた。胸のふくらみを消そうとしたのは、ギリシア同様、女性を男性化したいという意志が働いている。

「ストロフィウム」 (strophium)

- マミルラーレより一般的であったスカーフの一種で、乳房を圧迫しないで包み支える。ポケットのない時代だったので、ポケットの代用になることが多かった。

「カピティウム」 (capitium)

- ストロフィウムよりさらに幅広く柔らかいもので、庶民的な階層に普及した。

「エフォッド」 (ephod)

- ストロフィウムの変型で、ユダヤ女性が着用した、つり紐で支えるコルセット。

「セスタス」 (cestus)

- ギリシアから伝わった、アンダー・バストから太もものつけ根までの部分を覆うもの。

「スブリガクルム」 (sbucula)

- ローマ時代の閉鎖型ツーピースで、胸当てに近いものと、水泳用パンツに類似したものとかから構成されている。

「バンドレット」 (bandelette)、 「ローブ・リニュー」 (robe—ligne)

- 中世の12世紀のシルエットは、丸みのある胸、りっぱな腰が特徴だったが、13世紀になると胸はより高く、ウエストラインは強調されている。女性を衣服で包みこんでいるのだが、女性らしさを特徴づけるために、衣服の基本的な構成によって強調されることが重要だった。ローブ・リーニュと呼ばれたバンドレットは、細いバンドで乳房を支え、包みこんだ。

「ジポン」 (gipon)

- フィットしたチョッキで、腹部の価値を高めるために、胸を平らにしながらコルセットの役目を果たしている。

「ドゥブレ」 (doublet)

- 短い胴着で、カピティウムの伝統を受け継ぎ、シェーンズとブリオーの間に着用される。

「トゥルソワール」 (troussoir)

- 15世紀にはデコルテで肩はむきだしになり、胸はほとんど見せるようになるが、ドレスは大変長くなり、後ろにトレーンをひくようになったために、トゥルソワールを使って、トレーンをつり上げた。これは紐状の飾りがついた鉄製のかぎである。

「タッセル」 (tassel)

- コルセットとして用いられた。

「バスキーヌ」 (basquine)

- 中世末期のコルセットは、乳房をおおわず腰の部分をえぐり取るように形づけて、腹部を強調している。バスキーヌは、かたい布で作られ、ウエストを細く締めながら漏斗状に広がり、胸のふくらみを消して、ドレスがやっと上にのるだけのボリュームをつくって肩へとつながっている。バスキーヌは、幾何学的な外観によって、女性の胸の丸みと柔らかさを消してしまった。

「グルガンディーヌ」 (gourgandine)

- バスキーヌは、その原型のコルセットに戻り、これも胸をかなりきつく締めつけたが、ルネサンスの醜悪な外形になるほどではなかった。再び女性の胸は丸くなり、グルガンディーヌという胴衣ができる。

「コルセット」 (corset)、 「コルサージュ」 (corsage)、 「ビュスト」 (buste)

「コール・ピケ」 (corps pique)、 「コール」 (corps)

- 中世以来、時代によって色々な名称で呼ばれたが、これらコルセットの原型は、ほとんど変化していない。コルセットは一種の胸当てで、胸のすぐ下から肋骨の下まで胸部を包み、腰の上で先がとがった形で終わっているというモンテーニュの解釈が長い間通用した。また、大きな胸をきちっとおさめ、垂れ下がったものをしっかりと保ち、乱れたものを元の位置に戻すとも言われていた。

「フィシュール」 (fichu)

- フランス革命当時は、コルセットが消滅し、胸はコルセットで支えられなくなったので、豊かな胸に見せるために、胸を覆いあごのすぐ下にまで届くフィシュールと呼ばれる三角形の布が用いられた。この発想から、にせの乳房と呼んだ一種の下着が生み出される。

「ニノン風コルセット」 (corset a la Ninon)

- 帝政時代初期には、ナポレオンの指示によって、豪華な服装を競い合い、ニノン風コルセットは、再び鯨のひげ入りになった。これはウエストまで下がり、そこに女性の体の豊満さを強調するような小さなクッションがとりつけられていた。帝政時代の女性は、まるまると豊満で健康的であるのが理想的だった。

「ビュスチェ」 (bustiers)、 「ゲピエール」 (guepières)

- ウエストをマークし、胸を支えた。

「ブラジャー」 (soutien-gorge)

- 1912年以來すでに存在していたが、この頃までは、しなければならないものではなかった。1914年、シュミーズの上にコルセットをつけていたので、シュミーズは、きつく引っぱられて胸を支えていた。しかしコルセットが小さくなって、シュミーズは引っぱられなくなり、胸を支える機能を果たことができなくなり、ブラジャーがこの機能を持つようになった。最初のブラジャーは、シュミーズの上に着用されたが、まもなくシュミーズは不要なものとなった。

「スリー・イン・ワン」 (three in one)

- 1932年、ブラジャー、コルセット、靴下つりが一体となったもの。

「カザカン」 (casaquin)

- 18世紀、ペチコートがついたコルセットのようなもので、ウエストを強調し、肩を出し、紐締めがつくようになっている<sup>6)</sup>。

## 5. 現代の胸部のファンデーション

### ①ブラジャーの種類

「フルカップブラジャー」

- バスト全体をすっぽり包みこむブラジャー。ボリュームのあるバストに向いている。

「¾カップブラジャー」

- 上部¾がカットされたカップで、バストを中央に寄せて胸の形をつくる。

「½カップブラジャー」

- バストの上半身がのぞく半カップのブラジャー。ストラップレスタイプに多い。

「パッドッドブラジャー」

- カップの内側に入ったパッドで、ボリュームのないバストをバランスのよい形にする。

「ソフトブラジャー」

- ブラジャーをつけていないような感覚で、ソフトな素材がバストの自然なふくらみを出す。

「スポーツブラジャー」

- スポーツをする時の身体の動きや発汗に対応した、伸縮性、吸湿性のある素材のブラジャー。

「ロングブラジャー」

- バストからウエストのラインをすっきりと整える補整効果の高いブラジャー。

「シームレスカップブラジャー」

- カップに縫い目がなく、形がしっかり整えられているブラジャー。

「フロントホックブラジャー」

- ホックが前についている取りはずし楽なブラジャー。バックラインがすっきり見える。

「ストラップレスブラジャー」

- 紐のついていない、または取りはずしができるワイヤー入りのブラジャー。

「プランジングブラジャ」

- 前中心部をV字にアンダーまで深くカットしたブラジャー。

「オフショルダーブラジャー」

- ひもの間隔が広いブラジャー。ボートネックなど横広がりの首回りの衣服に向いている。

「ホルターネックブラジャー」

- 紐を首にかけるのでずり落ちない。ノースリーブのタートルネックに適している。

「バンドー型ブラジャー」

- カップの下に布がついた。一般的なタイプのブラジャー。

「ランニング型ブラジャー」

- ランニングタイプのブラジャー。

「チューブ型ブラジャー」

- ジャージ素材の紐なしブラジャー。

「ビスチェ型ブラジャー」

- 細い支柱が縦に入っているのもので、補整力のある紐なしブラジャー。

「ベアバックブラジャー」

- 紐なしで、アンダーの位置が低いので、背中をあいた衣服でも着る事が可能である。

「Tバック型ブラジャー」

- 後ろの紐が上下一直線になっているので、袖ぐりの大きい衣服に適している。

「Yバック型ブラジャー」

- 後ろの紐がY字型になっているブラジャー。肩から紐が落ちにくい。

「Vバック型ブラジャー」

- アンダーの後ろ中央からV字型に紐が出ているブラジャー。

## ②胸の形をカバーする方法

バストの底面積が小さい場合や、中程度の場合は、ラウンドカットやハーフラウンドカット

のブラジャーが適している。底面積が広く乳間隔も広い場合は、ストレートカットやサイドストレッチカット、フルストレッチカットのブラジャーが適している。

胸が小さいという悩みは一般的に多いが、普通は、 $\frac{3}{4}$ カップブラジャーで、バストの周囲の脂肪を集めれば1サイズ大きくなる。全体的に体型は太っていて胸が小さい場合は、アンダーの両脇に柔らかいボーンが縦に入っているものや、アンダーの幅が太いものなど、脇の脂肪を寄せてきてしっかり横や下から支えるブラジャーが適している。極端に小さくて寄せ集める脂肪がない場合は、カップにパッドがついているパッドッドブラジャーで、ほどよい形になるように補う。ボリュームアップするためには、シームレスブラジャーが適している。現在の体型の流行では、大きくて困る人は少ないと思うが、その場合は、全体を包み込むフルカップブラジャーで、横から重みを支えながら上向きにサポートするようにするとよい。特に体型も太い場合は、横幅のあるフルカップブラジャーで、下と脇の押さえがしっかりしたものを選び、普通のアンダー部分よりも布が多めで、背中のホックも多い方がよく、紐も太めの方が安定する。細くて大きい場合は、理想的なプロポーションではあるが、背骨に負担がかかったり、バストが体の幅からはみ出たりするので、ブラジャーで整える必要がある。そして胸の高さを保ちながら上向きに支えるものがよい。乳房の間隔が広い場合は、 $\frac{3}{4}$ カップブラジャーで離れた乳房を中央に寄せて、バランスのよい乳間にする。脇の押さえがしっかりとしたサイドストレッチタイプや、横にボーンの入ったものや、紐が外側についていたり、フロントホックであると胸を中央に向けて包み込むのに適している。垂れている場合は、ワイヤー入りのブラジャーで垂れている胸を上向きに支えるようにする。半カップや $\frac{3}{4}$ カップは不向きである。鳩胸の場合は、ワイヤー入り $\frac{3}{4}$ カップで乳房の輪郭をはっきりさせる。フィットしやすいカップの上辺が伸縮するものが適している。フルカップはカップの上辺部分があたったりしてしわが寄ったりするために不向きである。胸の位置が低い場合は、乳房の上の部分に圧力がかからないように、半カップか $\frac{3}{4}$ カップのものを選ぶ。カップの下に補整機能のあるものも効果的である。このように胸の形によってブラジャーを使い分けることが大切であるが、どんなブラジャーでも、つけているときと、はずしているときでは平均約1.69cmも測定値が違ってくるのでブラジャーの効果は大きいといえる。

## 6. 結 語

プロポーションの美しさに対する追求は、古今東西普遍的な事柄である。しかし美の基準は絶えず変化し、繰り返されて受け継がれて来た。身体の中でも胸は女性の最も女らしさを特徴づける部分であり、女性のプロポーションを魅力的に見せるために重要である。そのため古来から胸を整えるためのファンデーションは数々あり、西洋では、さまざまな研究や努力がされてきたといえる。時には、女性らしさを消すために胸を目立たなくするようなファンデーションもあったが、女性は、コルセットなどを、どんなに苦しくても身に付けることをやめようとしなかったことは、女性がそれだけ美しいプロポーションに対する願望が強かった事を象徴しているといえる。西洋に比べて日本は着物を着用していたため、胸は着物の中にすっぽり隠されて胸のファンデーションの発達は見られなかった。また体型的にもあまり必要がなかったのかもしれない。しかし現代は、日常的には洋服が着用され、食生活の変化から体型も欧米化している。これからも女性のプロポーションの理想は、変化し続けるかもしれないが、いつの時

代でも、その理想に近づこうと、食事制限をしたり、ファンデーションで工夫したり、衣服でカバーしたりして努力し続けられると思われる。

引用文献

- 1) 高尾澄江：服飾デザインへのアプローチ、同文書院、27・29 (1987)
- 2) 淀川美代子：a n・a n、株式会社マガジンハウス、739、49 (1990)
- 3) 大矢愛美、中川早苗：繊維製品消費科学、30、576 (1989)
- 4) 池澤康郎：身体のエステティック、ポラ文化研究所、233・249 (1982)
- 5) インナー・エクスプレス：下着のおしゃれ学、永岡書店、34・53 (1990)
- 6) セシル・サンローラン：女の下着の歴史、文化出版局 (1981)
- 7) バーナード・ルドフスキー：みっともない人体、鹿島出版会 (1989)
- 8) 柳沢澄子：被服体型学、光生館 (1987)